

小学校音楽科授業におけるアウトリーチ導入に関する一考察

— 箏の実践を通して —

瀧 みづほ〔鹿児島大学教育学研究科〕 今 由佳里〔鹿児島大学教育学部（音楽科教育）〕

A Learning about the Music Outreach for Music Education in Japanese Elementary School: Through the music class of *KOTO*

TAKI Mizuho・KON Yukari

はじめに

近年、音楽教育の場で“アウトリーチ”という言葉が盛んに耳にするようになった。日本音楽教育学会が刊行する『音楽教育実践ジャーナル (vol.10 no.2 March 2013)』においても「音楽教育におけるアウトリーチを考える」という特集が生まれ、アウトリーチの歴史的経緯、海外の事例、学校におけるアウトリーチ最前線などから検討がなされている。

アウトリーチとは英語の *outreach* に由来する言葉で「外に手を伸ばす」という意を有していることは数多くの論考で述べられている。それはすなわち、公共ホールや演奏家らが「外に手を伸ばす」つまり「外に出かけていく」という意に解釈する事ができる。学校教育においては、1998年に告示された学習指導要領の「総合的な学習の時間」導入によって、このアウトリーチ活動が盛んに取り入れられるようになったという経緯がある。音楽科に関しては、とりわけ和楽器など日本の伝統音楽の学習においてアウトリーチは活用されてきた。その背景には教師の中に和楽器を演奏できる人材が少ない、という理由がある。筆者の一人瀧は、現勤務校において、鹿児島市の芸術家派遣プロジェクト制度や学校支援ボランティア制度を活用し、年に数回外部講師として演奏家を招いた授業を行っている。これまでの授業スタイルを振り返ると、子どもたちが外部から招いた演奏家の演奏を聴いて感想を書くという授業や、体育館のような広い場所における数クラスでの教授スタイルが主であった。

筆者は、これまでの単発的な授業スタイルに反省を抱き、外部講師と子どもたちとの相互コミュニケーションの高まりや、生涯にわたって日本の伝統音楽に親しむきっかけづくりに、アウトリーチ活動の可能性を探りたいと思い、本研究を着手するに至った。アウトリーチ導入に関する考察を行うにあたり、外部講師と教師が連携した効果的な学習の方法を検討することを課題として本論をすすめる。それは子どもたちが外部講師による生演奏を通して、日本の伝統音楽や箏に興味を持ち、独特な響きや音色の美しさを味わって想像豊かに聴く活動や、箏の体験活動を通して自国の音楽文化に愛着を持つ大切さを育むことが、箏のアウトリーチにおいては肝要であると考えているからである。

本稿では、筆者瀧の勤務校である鹿児島市立西谷山小学校5年生を対象とした授業実践の記録・子どもの発言記録やワークシートの分析結果から、アウトリーチ活動の効果的な導入に向けた方法を考察する。

1. 音楽科授業とアウトリーチ

(1) 音楽科教育におけるアウトリーチ

『教育音楽小学版』に記載されている、音楽科授業実践例を過去5年間さかのぼってみると、郷土の民

謡や和楽器，オーケストラ楽器の学習のために，外部講師を招聘する授業が増加傾向にあることが読み取れる。アウトリーチ活動が盛んに学校教育に取り入れられたのは，1990年代後半といわれ，これは前述した通り1998年告示の学習指導要領で導入された「総合的な学習の時間」の影響が大きいと思われる。この改訂では，中学校の音楽科授業で和楽器を学習することを義務化するとともに，小学校では和楽器を積極的に授業に取り入れることを指導目標に掲げている。しかしながら教師側からは「和楽器を演奏したことがない」「日本の伝統音楽に関する知識が少ない」という課題が寄せられた。このことの解決策のひとつとして，日本の伝統音楽や和楽器に関するアウトリーチが導入され，この活動が盛んに行われるようになった経緯がある。しかしこの取り組みは，外部講師を招聘するだけの活動に終始しがちになり，日本の伝統音楽に対する学習の深まりがみられないのではと危惧を感じる。

筆者も外部講師を招聘した授業は毎年2題材程度経験してきたが，授業に向けての外部講師との打ち合わせ（場の設定・資料準備・楽器の管理等）は勿論，講師招聘前に児童が学ぶべき知識や招聘後の振り返り活動，子どもたちの感想・疑問への対応などは毎年・毎回課題が残る。したがって外部講師を招聘する場合，その活動における目標と内容を十分打ち合わせ，授業ではどのような役目を外部講師に担ってほしいかを伝え，充実した学習が展開できるよう心がけている。

（2）アウトリーチの活動分類

アウトリーチが導入され始めて15年を経ようとしているが，その用語には現在でも様々な解釈や用例がなされている。またその活動内容も同様で多岐にわたっている。ここで，齋藤（2013）^①が行ったアウトリーチ活動の分類を利用して，整理していきたい。

齋藤は，アウトリーチ活動を大きく①鑑賞系，②創造系，③技術指導系に分けている。さらに①鑑賞系の中でも「鑑賞型」と「参加型」にわけ，「鑑賞型」では芸術鑑賞教室タイプ，音楽学習タイプ，総合学習タイプ，「参加型」では体験タイプ，総合タイプと分類している。同様に②創造系では即興音楽ワークショップを行う「参加型（単発・集中）」と「協創型（継続・長期）」，③技術指導系では「合唱型」「器楽型」「わが国の伝統音楽型」に活動内容から整理している。

小学校におけるアウトリーチは，教師が不得手とする専門分野や，子どもたちが普段接することが少ない楽器の体験授業を対象に行われている場合が統計的に多いのではなかろうか。このような趣旨から行われるアウトリーチは，子どもたちの学習内容の充実に効果的に作用する結果が期待できる。

（3）音楽科におけるアウトリーチ導入に関する課題

林（2013）^②は，日本におけるアウトリーチの現状について「1990年代後半に日本にアウトリーチが紹介されて約15年。アウトリーチは一応の定着を見せ，導入の時代は終わったといえるだろう」と分析している。そして「供給する側の多様化が進む中，アウトリーチの内容に目を向けていく新たな時代が始まっているのではなかろうか」という提言を行っている。前述しているように，アウトリーチ活動に関する日本への導入と定着化は，一定の成果が認められることであろう。今後はその課題について明らかにし，さらにこの活動を発展していくことがのぞましい。

音楽科におけるアウトリーチ導入の課題について以下2点が挙げられる。

① 外部講師として招く演奏家と音楽教師との連携・協働

これまでのアウトリーチ活動の多くは，提供する演奏家の視点で授業が構成され，実施されていることが多いという課題が指摘できる。しかしながらクラスの子どもの実態や音楽的発達段階，音楽的背景

を音楽教師から得ることによって、授業はさらに効果的な学習へと変化していくのではないだろうか。これまでは、外部講師に1時間の授業展開を任せる、という事例が多く見られたが、今後は子どもの指導を外部講師である演奏家に全て委ねるのではなく、音楽教師も積極的に授業に参加し、外部講師と協働で行っていくことが必要である。このような背景から子どもと演奏家、そして音楽教師三者のコミュニケーションが取れた授業を目指していきたい。

② 系統性を考慮した導入

外部から講師を招き音楽の授業を行う場合、ややもすると単発的な1回だけの授業に終始してしまう場合が見受けられる。発展的な学習に繋げていくためには、教師側が学習指導要領や音楽科カリキュラムを見据えて、系統性を有した学習に展開できるように考慮する必要があるだろう。外部講師が演奏する作品について、作曲者や用いられる楽器などの学習を事前に行い、子どもたちが授業内容の理解をより深め、これまで学習してきたことが発展できるような工夫が必要となってくる。

本稿では、アウトリーチ導入に関する前述の課題を受けて、①外部講師として招く演奏家と音楽教師との連携・協働に着目し、研究をすすめていく。

2. 仮説の設定

本実践は、小学校におけるアウトリーチ導入による授業を通して、演奏家と音楽教師が連携した効果的な学習の方法を検討していくことを主要な目的としている。以下の仮説は、上記してきた課題と筆者自身がこれまで外部講師を招いて行った授業の際に抱えた課題に基づいて立てたものである。

仮説1) 演奏家と教師とが連携することによって学習効果がより期待できる。

仮説2) 生演奏の感動を通して日本の伝統音楽に対する理解が深まる。

仮説3) アウトリーチを教室で行うことにより、演奏家と子どもたちが密接な相互コミュニケーションを図りやすくなる。

仮説4) 楽器が少なくとも教材へのアプローチを工夫することによって効果的な学習になる。

以上4視点の仮説から、授業を構想し検証授業を行う。

3. 授業実践の概要と授業記録

研究の方法としては、2013年7月11日、18日に筆者の勤務校である鹿児島市立西谷山小学校5年生の「和楽器の響きを味わおう」の授業を実践し、その際の授業記録および発言記録、ワークシート等から、仮説の視点に基づき授業の効果を分析・考察していく。

(1) 授業の概要

① 概要

【対象者】 鹿児島市立西谷山小学校
第5学年2組

【児童数】 39名 (男子20名, 女子19名)

【授業日時】 2013年7月11日(木) 3校時
2013年7月18日(木) 3校時

【指導者】 瀧 みづほ 本藏 理恵 (箏演奏家)

② 児童の実態

本時で対象とする5年2組の子どもたちの伝統音楽に関する事前の意識調査の結果は、以下表1の通りである。

【表1：和楽器に関する意識調査】

質 問	子どもたちの回答
質問1 音楽を聴く活動は好きですか	はい 35 いいえ 4
質問1の理由	明るい気持ちになる 8 聴いたことがない曲を聴ける 5 想像するのが楽しい 4 心が温かくなる 2 どんな楽器が使われているか分かるから 2 はやい曲とのんびりした曲の違いを聴くのが好き 2 その他少数意見 特に面白くないから 2 わからない曲があるから 2
質問2 感想を書くのは好きですか	はい 20 いいえ 19
質問2の理由	自分の思いを伝えられる 7 書いているといい所がうかんでくる 2 聴いた曲の特徴や面白さを表現できるから 2 色んな自分の感想を書けるから 1 その他少数意見 感想をどう書けばよいかわからない 10 うまく表現できない 4 文章を書くのが苦手 2 音楽は好きだけど感想を書くのが苦手 1 口で言う方が好き 1 特徴をまとめるのが苦手 1
質問3 伝統音楽は好きですか	はい 11 いいえ 2 わからない 26
質問4 和楽器で知っている楽器は何ですか	たいこ 11 しゃみせん 7 こと 3 びわ 2 ふえ 2 しゃくはち 1
質問5 友だちと一緒にする活動は好きですか	はい 35 いいえ 4
質問6 考えや意見を伝える活動は好きですか	はい 20 いいえ 19

質問1より子どもたちの多くが、鑑賞することの良さを感じて学習していることが分かる。内容を見ても「明るい気持ちになる」「想像するのが楽しい」など楽曲自体を楽しんでいる理由以外にも、「どんな楽器が使われているか分かるから」「はやい曲とのんびりした曲のちがいをきくのが好き」など曲の構成や曲想を楽しんで聴いている様子がうかがえる理由もあった。質問2からは、感想を書くことに苦手意識を持っている子どもが多いことが分かる。理由としては「うまく表現できない」「文章を書くのが苦手」などがあり、聴く活動には好みを示しているが、書く活動には苦手意識を有していることが分かる。質問3、4では、「伝統音楽」「和楽器」という言葉について「わからない」という子どもが半数以上を占め、日頃の生活で伝統音楽に親しんでいない実態がうかがえた。質問5、6では、グループ学習は好きであるが、自分の意見や感想を人に伝えることを苦手とする子どもが多いことが分かった。

以上の実態調査の結果から、生演奏を聴かせると同時に実際の楽器を提示し、名称や構造を説明することによって、子どもたちは日本の伝統音楽に関心を深め、さらには鑑賞する活動においても、より積極的に取り組めるように変化するのではないかと考える。生演奏を鑑賞する活動では、楽曲の中にもどのような桜がイメージできたか等の視点を持って聴かせることで、実際に講師の演奏を聴かせた際に、様々な桜の様態をイメージしやすくなり、感想文を書く活動に反映するのではと考える。また表1の質問2「感想を書くのは好きですか」の問いに対して、19人の児童が「いいえ」と回答し、書く活動に対する学習への消極性を表していた。そこで本授業のまとめに、これから題材曲を学習する4年生へ向けて箏の紹介文を書く活動を設定することで、感想を書く活動にも子どもたちが意欲的に取り組むのではと考えた。また、講師の生演奏を間近で鑑賞し、音楽への思いを聞くことで、子どもたちの日本の伝統音楽に対する意識が大きく変化し、「書く」意欲へと繋がるのが期待できる。

③ 題材について

本題材では、①日本の伝統的な楽器である箏の作品を生演奏で鑑賞し、②箏の構造や各部分の名称・音色・演奏の仕方を知り、③実際に箏の演奏体験をし、④箏演奏家の思いや意図を知ること、さらに日本の伝統的な文化を大切にしていこうとする態度を育成し、⑤これから『さくらさくら』を学習する4年生に向けて箏の紹介文を書く活動を通して箏の知識の定着を図る、という内容で構成した。これは、

子どもたちが箏のもつ雰囲気や特徴を感じてその良さに気づき、日本の伝統音楽や和楽器を大切にしようとする態度を育てることをねらいとしている。指導者は、子どもたちが日本の伝統音楽の雰囲気や特徴を感じ取りながら、楽曲の持つ良さや美しさを味わって想像豊かに聴く能力を高めるためには、子どもたちが生演奏を聴く体験や外部講師との対話を重視した学習が効果的であると考えている。

外部講師に演奏依頼した楽曲は、子どもたちが4年生の時に学習した歌唱共通教材『さくらさくら』に関連して、『さくら変奏曲』である。日本古謡『さくらさくら』をもとに編曲した箏曲はいくつかあるが、今回演奏していただいた楽曲は、沢井忠夫作曲『二つの変奏曲より さくらさくら』である。これは、満開の桜が散っていく様子をトレモロやグリッサンドで表現し、箏の音色や旋律の特徴を感じ取りながら楽曲のもつ良さを味わうことができ、子どもたちがその魅力を十分に感じ取れる作品である。授業ではアウトリーチの特性を活かして、外部講師と子どもたちとの相互コミュニケーションが積極的に図られるよう計画し、展開していく。また箏の構造や各部の名称・演奏の仕方・箏の楽譜についても知り、グループで箏を演奏体験する活動を通してさらに日本の伝統音楽や和楽器に関心を深めさせたい。

上記した学習を通して、子どもたちに日本の伝統音楽や和楽器に親しみを持たせ、その良さや美しさを味わって聴こうとする態度や、4年生に紹介文を書く活動を通して日本の伝統音楽の特徴に気づき、自国の文化を大切に継承していこうとする意識を持たせることが出来ると考えられる。

④ 授業の流れ（全2時間）

主な学習活動		時
1 音色や旋律の特徴を感じながら箏の生演奏を聴き、関心を深める。 2 演奏者の思いをきき、日本の伝統文化について考える。		1
1 作曲家「宮城道雄」について知る。 2 箏の楽譜の読み方や演奏法を知り、1つの箏を効果的に用いてグループ練習をする。 3 4年生に向けて日本の伝統音楽や箏についての紹介文を書く。		1

【評価規準】

- 日本の伝統音楽や箏に関心をもち、それらの特徴を理解して聴く学習に主体的に取り組もうとしている。
- 日本の伝統文化を大切にしていこうとする気持ちを持つ。
- 日本の伝統音楽や箏について紹介する活動を通して日本の伝統音楽の良さに気付く。
- グループで協力して箏を練習する。

(2) 授業実践の記録

授業の記録は、以下表2、表3の通りである。

【表2：第1時の授業記録】 T：音楽授業担当教師 L：外部講師（演奏家）

目標		
<ul style="list-style-type: none"> ・ 演奏家による生演奏を聴き、日本の伝統音楽の雰囲気や特徴を感じ取りながら、楽曲の持つ良さや美しさを味わって想像豊かに聴く。 ・ 箏演奏家の思いや考えを知り、日本の音楽を大切にしていこうとする態度を育てる。 ・ 箏の構造や各部の名称について知り、和楽器について関心を深める。 		
学習活動	教師の支援	子どもたちの様子
1 『さくら変奏曲』の最初の部分を聴き何の変奏曲かを考える。	T演奏家の紹介、『きらきら星変奏曲』をLで演奏し変奏曲の構造について説明する。 L『さくら変奏曲』の最初の部分を箏で演奏する。	・ 箏の演奏を聴き、のぞき込んだり背伸びをしたりして興味を持ってみている。 ・ 「すごい」と思わず笑顔で拍手をする。 ・ 何の変奏曲かと聞かれ『さくらさくら』と一斉に答えている。
2 本時の学習について話し合う。 「『さくら変奏曲』を聴き箏の響きを味わおう」	T本時の学習の確認。	・ めあてをワークシートに記述する。
3 箏について知っていることを発表する。	T「箏の生演奏を観たことがある」「家に箏がある」を尋ね、日本の伝統音楽に対する経験を振り返らせる。	・ 「演奏の様子を観たことがある人」という質問に対し4人が挙手をしている。その中でも家に箏がある人は3人であった。 ・ 「ウォー」「すげえ」等の驚きの声が口々にもれている。
4 箏の構造、各部の名称や演奏方	T 箏の由来について話す。	・ 教師の話をもっと聞く。箏を見つめたりのぞき込んだり

<p>法について知る。</p>  <p>【写真1：箏の構造の説明】</p>	<p>L 高貴な幻の生き物を由来に作られたこと、素材が桐であること、生田流と山田流の違い、柱や弦について、左手の使い方について説明する。</p> <p>T 子どもたちに箏の構造を理解させるため、箏を縦に持ち、子どもたちに分かりやすく提示する。</p> <p>T 花見の経験を尋ねる。</p> <p>T 演奏の中のどんなところにどんな桜がイメージできたかを考えることについて説明。</p>	<p>する姿が多数みられる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・箏の名前の由来は、空想上の生き物と聞いて「ワニ」「へび」「竜」と答える。竜角、竜舌、竜眼など竜に由来する各部の名称を聞くことで、イメージを膨らませている。 ・集中して聞く。のぞきこんだり隣の人と顔を見合わせたりしている。 ・箏柱の話の時には、演奏を真似て手を動かしながら聞いている。 ・弦を押して音が変わった時は、「ビヨンと面白い音になるなあ」と不思議そうな顔をしている。 ・今までどんな桜を観たことがあるかの問いに「しだれ桜」「満開になった桜」と答える。花見の経験は大多数で桜の多様な様子をイメージしている。
<p>5 『さくら変奏曲』の生演奏を聴き感想や質問などをまとめる。</p>  <p>【写真2：生演奏を見つめる様子】</p>	 <p>【写真3：桜並木の絵画】</p> <p>L 『さくら変奏曲』の演奏</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・桜並木の絵画をみて「ウワーきれい」とつぶやいている。 ・立ったりのぞき込んだりして聴こうとしている。 ・指先の動きをじっと見つめている。リズムが変わったところでは、どんな演奏に変わったんだろう、とのぞき込む。 ・前の席の人の間から、身を乗り出して聴こうとしている。 ・自分が知っているメロディーになると、体で拍を取りながら聴く。最後の音が鳴り終わると、満開の笑みがこぼれ拍手が鳴りやまない。 ・忘れないうちに一気に感想を書き始める。時に空を見ながら思い出して書いている。
<p>6 感想や疑問点を発表する。</p>  <p>【写真4：代表児童の体験】</p>  <p>【写真6：講師によるピアノ演奏】</p>	<p>T 感想や質問を発表させ全体で共有する。</p>  <p>【写真5：感想や疑問点の発表】</p> <p>L 「箏の楽譜はピアノと違い漢字で書かれています。箏のドレミは柱を動かして調整します。」「よく観ていましたね。黒い点は箏柱を動かす音を調整するためのものです。」「講師の先生は実はピアノも上手なんだよ。聴いてみたいです。」</p> <p>L ピアノで『さくら変奏曲』を演奏する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「強いところは満開な感じ、弱いところは花びらが散っていく感じがした。クレシェンドとデクレシェンドは、風と一緒に花びらが飛んでいく感じ」「桜の花びらが散ったり、風が優しく吹いて花が咲くのが浮かんだ。弦を強く弾くと大きな音小さく弾くと小さな音」「弦を引っ張ったり押ししたりすると面白い音になった」「曲の中にたくさんの桜があった。舞う桜、散りゆく桜、満開の桜、つぼみの桜など。たった13本の弦で音を出せるのがすごい」「桜の花びらが散っていく様子や、満開の桜が見えた。夏なのに春を感じた」「箏の右側が高音で、左側が低音だった。13本しかないのに、色々なメロディーが出来るのが驚いた。」「同じ音でも指の強さで音の弱強が変わっていった。音が強ければ弱く、桜の花が舞い降りてくるイメージがした」などの感想がみられる。 ・「弦に黒い点があるけど何?」「楽譜はどんな?」「箏のドレミはどうなっているの?」「箏には#やbはあるの?」等の質問が出された。 ・納得の顔を見せている。箏の楽譜を見せてもらい「漢字だー」と驚いている。「簡単に七七八で演奏できるか実験」に数名が挙手する。 ・ピアノでも『さくら変奏曲』を聴くことができるとワクワクしている様子。
<p>7 演奏家の思いを聴き日本の伝統文化について考える。</p>	<p>L 箏の音色の魅力に惹かれ箏を習い始めた経緯を話す。ピアノと箏との表現の違いや、日本の伝統音楽の雰囲気、和楽器が身近にあった、日本の昔の生活と娯楽について話す。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・話をじっと聞き、時折メモを取っている。
<p>8 本時を振り返り学習のまとめをする。</p>	<p>T 講師にお礼の言葉を伝える。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「箏を触ったり演奏してみたくなくなった」「日本の楽器っていいなと思った」「心が落ち着く」「ゆったりとした気持ちになる」「箏が好きになった」「家にある箏を演奏してみたい」「箏についてもっと調べてみたい」という記述が子どもたちの感想に見られた。

【表3：第2時の授業記録】

<p>目標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 箏の楽譜の読み方や演奏の仕方について知り、1つの箏を効果的に用いてグループで箏の演奏を体験する。 ・ 4年生に日本の伝統音楽や箏について知らせる活動を通して日本の伝統音楽の良さに気付く。 		
<p>学習活動</p>	<p>教師の支援</p>	<p>子どもたちの様子</p>
<p>9 『さくら変奏曲』の最初の部分を聴き、何の変奏曲か、何の楽</p>	<p>T 前時の学習を想起させるためにCDを聴かせる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・前時の学習を振り返って『さくら変奏曲』を聴く。 ・曲名を聴かれ『さくら変奏曲』と一斉に答える。

器で演奏されているかを考える。		
10 本時の学習について話し合う。「ことの音色を味わい和楽器の良さを見つけよう」	T 前時の学習を振り返る。 (曲名、楽器、由来など)	・由来について聞かれ「中国」「奈良時代」と前時に学習したことを振り返っている。
11 作曲者について知る。	T 音楽室後方の肖像画に目を向ける。 T 宮城道雄の生い立ちや、努力をして素晴らしい演奏家・作曲家になった話をする。	・教科書の写真と照らし合わせながら、肖像画を見ている。 ・眼が全く見えなくなった話や、自分たちの年には師匠になった話を聞き自分自身と重ね驚いた様子。
12 箏の楽譜の読み方や演奏の仕方を知りグループ練習する際の手順について知る。 	T 前時のワークシートの結果から、大多数の人が箏を演奏してみたいと思っていることについて話す。 T 本時は全員が箏の演奏を体験することを知らせる。 T 縦書きの楽譜の読み方を知らせる。 ・リズムの確認 ・グループ練習の方法について（1つの楽器で3人が合奏できる方法） T教師がパートごとに演奏する。 T楽譜の読み方の確認。 T「楽譜の○や△は何だと思う？」 T パートごとに演奏する。 ・1と2のパートを合わせて演奏する。 ・3のパートと1, 2のパートの違いを確認する。 ・3のパートは子どもが担当演奏する。 T 子どもと一緒に合奏する。 Tグループ練習の手順を話す。	・箏を演奏してみたい人という質問に対し、大多数の挙手が見られた。本時は全員が箏の体験をするという活動内容を聞き、嬉しそうな様子が見られる。 ・「箏の楽譜は？」の問いに「縦書き」「漢字で書かれている」と前時の学習を生かして答える ・拡大楽譜を見ながら教師の演奏を確認して聴く ・パートごとに歌う。（七七八・）手拍子でリズムをとる。 ・休符や拍の確認。教師の演奏に合わせて手で拍をとる。「先生と一緒に演奏してくれる人？」と聴くと多くの児童が挙手をする。 ・代表の子どもは「（3のパートは）何回二、一を続ける？」と拡大楽譜を見ながら確認する。他の子どもたちは、代表の子どもと教師との演奏に興味を持って聴いている。うまくできると拍手したり歓声を上げたりする。
13 グループで練習する。 	T グループ練習をする。	・グループで速さを合わせて練習する。ペアで教え合う。楽譜を見てリズムを確認したり、指で友だちの動きを真似たりしている。
14 4年生に紹介文を書くためにグループで話し合う。	T これから学習する4年生に紹介する文を作る活動について確認する。（音色、由来演奏の仕方等）	・項目ごとに個人で考えその後グループでまとめて紹介文を作る。
15 紹介文を発表する。 	T 紹介文をグループで発表させる。グループ演奏がうまくいったグループには発表させ、本時の学習を振り返る。	・「皆さんは箏を知っていますか？・・・」「演奏するときは、親指と人差し指、中指に『つめ』をつけて演奏するよ・・・」等4年生へ向けた紹介文をまとめてグループで発表する。 ・友達の演奏に興味を持って聴く。
16 本時を振り返り学習のまとめをする。	T 本時の学習を振り返る。	・楽譜の読み方や演奏の仕方を振り返る。

4. 仮説の視点に基づく授業分析

仮説1) 演奏家と教師とが連携することによって学習効果がより期待できたか。

アウトリーチ活動を行う際、演奏家と音楽授業担当教師との連携は非常に重要である。今回依頼した演奏家は筆者の前勤務校の保護者であり、当校にも5年前に全校児童参加による芸術鑑賞会で演奏をしていただいた経緯がある。また鹿児島市の芸術家派遣プロジェクト制度に登録しているプロの演奏家であるため、これまでも様々な学校において演奏活動を経験し、学校現場の状況や子どもたちの反応に関しても十分把握していた。今回は授業前から電話やファックス、メール等で頻繁に連絡を取り合い、

また前日の最終打ち合わせではさらに緻密な確認を行った。打ち合わせでは、プログラムの内容、授業のタイムテーブル、場の設定、準備物の確認など細かい調整をして、当日の授業がスムーズに進められるように話し合った。教師側からは子どもたちのこれまでの学習内容を知らせるとともに、子どもたちに伝えて欲しい3つの主旨を演奏家をお願いした。それは①箏曲『さくら変奏曲』の生演奏を通して、子どもたちに日本の伝統音楽と和楽器の良さを伝えてほしい、②ピアノでの『さくら変奏曲』を演奏してもらい(演奏家はピアノ演奏での芸術家派遣プロジェクトの登録もあるため)、箏とピアノとの表現の違いを子どもたちに気づかせてほしい、③箏の演奏活動を行う中で考えていることや、日本の伝統音楽を大切に思う気持ちを、まとめの活動の際に話してほしい、という3点である。プロの演奏家と直接触れ合える絶好の機会であるため、教師は子どもたちが演奏を十分に味わい、演奏家の伝統音楽に対する思いを知り、さらに演奏家との相互コミュニケーションが効果的に図られるよう、時間配分や授業の構成に配慮した。演奏家との打ち合わせをしていく中で、『さくら変奏曲』のどの部分にどのような桜をイメージできたか、という発問や、桜の柔らかさや華やかさが感じられる絵画を提示する案など、演奏家からも様々なアイデアが寄せられ、授業の展開が決まっていった。演奏家と教師が協力して授業を構成することによって、カリキュラムに沿った系統的な学びの中、演奏家の芸術性を加えた授業内容を設定できた。またこのことが子どもたちの伝統音楽に対する理解の深まりにつながったことと考察できる。

仮説2) 生演奏の感動を通して日本の伝統音楽に対する理解が深まったか。

今回の指導要領の改訂で「日本の伝統音楽に親しむ」活動が重視された。しかし実際には子どもたちの身近なところに和楽器はなく、未だ子どもたちにとって日本の伝統音楽は敷居が高い、というのが現状である。またテレビやラジオ、街中で流れる音楽はリズムカルで刺激的な音楽が多く、日本の伝統音楽に親しむ日常生活には程遠いと言わざるをえない。感性豊かなこの時期の子どもたちには、学校現場で多種多様な音楽に出会わせ、感動を与える機会を持たせることは肝要である。国際化や情報化が進んだ現代だからこそ日本人としての自覚を持たせ、伝統音楽に対する理解を基盤にして、自国の音楽文化に愛着を持つ態度を育てたいものである。生演奏を通して得られた印象・イメージ・感動、演奏家の言葉を通して得られた共感や驚きなどは、成長著しい子どもたちに強いメッセージを届けることとなるのではないだろうか。学習活動14の“これから『さくら

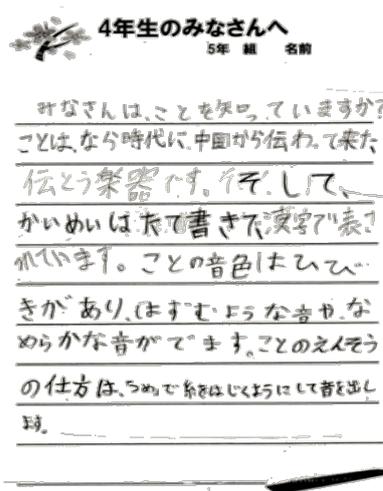


図1. 授業後のワークシートより

さくら』を学習する4年生に紹介文を作成する活動”では、「みなさんは箏を知っていますか。箏は・・・」と相手を意識した文を作ったり、箏の演奏体験で学んだ学習を項目ごとに分けて文を作ったりと、紹介文を作る活動が、子どもたちの自国の音楽に対する意識を高めるきっかけや、言語活動の拡がりにも繋がったことがわかる。感受性豊かなこの時期に、生演奏を通して日本の伝統音楽に親しんだり感動したりした経験がある子どもは、成長した後においてもまた自国の音楽に親しみ、聴いてみたいという思いが湧きあがるのではなかろうか。また箏の演奏を体験する活動を通して、より日本の伝統音楽や和楽器を身近に感じ、さらに演奏技術を向上させたいという意欲に繋がったり、箏を演奏した経験を通して日本の伝統音楽への印象を深めるきっかけにもなるのではないだろうか。そのためにも感受性豊かな成長段階にある子どもたちに、生演奏を聴く学習を通して和楽器に親しませ、日本の伝統音楽との出会いの契機になる学習を設定することは肝要と考える。

仮説3) アウトリーチを教室で行うことにより演奏家と子どもたちが密接な相互コミュニケーションを図りやすくなったか。

公共ホールで行われているコンサートとは異なり音楽室でのコンサートは、演奏家と子どもたちとの音楽を通じた交流が密に体験できる場であると言える。学習活動6における子どもたちの感想を見ると「弦を左手でつまんだり押さえたりする動きで音が変化していた」「弦の黒い点は何のためにあるのだろう」という間近で演奏を鑑賞したからこそその感想や疑問が出され、「曲の中にたくさんの桜があった。舞う桜、散りゆく桜、満開の桜、つばみの桜など。たった13本の弦でこんな音を出せるのがすごい」「音が強いところは満開な感じ、弱いところは花びらが散っていく感じがした。クレシェンド、デクレシェンドのところは、風と一緒に花びらが飛んでいく感じがした」など、生演奏を通して得られた感動を伝える、子どもの豊かな感性が随所でみられた。また子どもたちが演奏家の指さばきをのぞきこむ様子が見られたり、手の動きに合わせて自身も箏を演奏しているかのように真似る様子が見られること等からも、目の前での生演奏に集中力を高め興味を持って観察し、音楽を全身で楽しむ様子うかがえる。また授業中に出された質問や疑問にも即座に回答してもらえ（学習活動6）ということが、子どもたちを積極的に授業に向かわせることにつながった理由のひとつではなかろうか。「演奏する前の顔が真剣だった」「演奏が終わった後に礼をしていた」などの感想からは、演奏家が演奏に向かう真剣な姿や、日本の伝統音楽に対する姿勢を子どもたちが肌で感じたり、音が消えた後に残る余韻や静寂が日本の伝統音楽の特徴のひとつであるということにも気付いていたことがうかがえる。これはコンサートホールや体育館などの広い場所でのコンサートではなく、演奏家の息づかいをすぐそばに感じられるくらいの至近距離で演奏を鑑賞した効果ではなかろうか。また演奏家にとっても、距離の近さから子どもたちの顔がよく見えることで、反応を直接的に受け止められ、自身の今後の演奏活動の参考にもなるというコメントも寄せられている。さらに、子どもたちからのリクエストに応じて演奏をするという場面も見られ、演奏家と子どもたちとの音楽を通じた相互コミュニケーションが授業中随所に見られた。

仮説4) 楽器が少なくとも教材へのアプローチを工夫することによって効果的な学習になったか。

平成20年の学習指導要領改訂では、日本の伝統音楽に親しむ学習の充実が図られたが、依然として学校現場では箏を含めた和楽器の所持率は低い。鹿児島県内の状況をみると、ほとんどの学校が箏を全く持っていないか、または持っても一面のみというのが現実である。本仮説の主旨である少ない箏を効果的に用いる方法を演奏家に提案したところ、演奏家も同じ課題を抱えていることに気づかされ、教育現場における本課題解明の必要性を感じた。そこで一面しかない箏を効果的に用いることで、子どもたちの活動が充実する授業内容の改善を図った。具体的にはひとつの箏を3人で合奏できる楽譜を用意し、子どもたち全員が箏の演奏体験を行えるようにした。前時に演奏家が演奏した『さくら変奏曲』に因み、子どもたちは『さくらさくら』を主旋律、飾りのふし、伴奏と3つのパートに分けて演奏体験を行った。2時間目の授業導入時には、授業担当教師と代表児童との即興の合奏を行うことで、他の子どもたちから自分もやってみたい、というさらなる意欲の高まりがみられた。本時では教師と児童との合奏のみであったが、時間が許せば演奏家と子どもたちとの合奏の時間を持つことも箏の芸術性に触れられる有効な機会となっていくことであろう。前時に演奏家の演奏を間近で聴き、ほとんどの子どもが「自分も演奏してみたい」という意欲の高まりがあったため、演奏家に参加しない2時間目の活動にも積極性が見られた。子どもたちは3人並んで演奏するため、お互いの呼吸や拍感を感じやすく、また3つのパートを合わせることで音が美しく



写真10：3人での演奏

重なるアンサンブルの楽しさを感じている様子であった（学習活動 13）。また仲間と息を合わせながら合奏していく中で、相手を思いやる気持ちや優しさなどが芽生えている姿も見られた（写真 10 参照）。今回は 2 時間という時間設定だったため十分な練習時間は設けられなかったが、ワークシートや子どもたちの発言記録から達成感・満足感のある授業展開につながったことがわかる。それは教師が子どもたちの実態に沿った楽譜を選択したり、3 人で息をそろえて合わせる演奏の楽しさに子どもたちが夢中に取り組んだためであろう。

5. おわりに

本研究では、演奏家と教師とが連携したアウトリーチ導入に関する考察を行い、実践的検証を行ってきた。以下は、外部講師として招いた、箏演奏家本蔵から授業終了後に寄せられたコメントである。

今回外部講師として授業に携わる中で、心がけたことが 3 点あります。1 点目は、生の演奏を鑑賞するので、指の動きや弦の揺れなど細かいところまで観てもらえるように、出来るだけ子どもたちの近くで演奏するようにしました。2 点目は、箏の世界や楽曲『さくら変奏曲』に十分浸ってもらうために、桜並木の絵画や夜桜・しだれ桜などの風呂敷の提示で雰囲気を目覚めに訴えようと思いました。3 点目は、私自身ピアノを 3 歳の頃より習っており、ピアノでの『さくら変奏曲』も当日演奏しましたが、まとめの話のところでピアノでは表現できない箏の魅力についても伝えられたらと思い、お話しさせていただきました。子どもたちに、情景を思い浮かべながら、想像豊かに聴いてもらいたいという私自身の思いが、演奏直前の音楽担当の先生の分かりやすい説明で、さらに達成されたのではないかと嬉しくなりました。今までのどこの学校での授業より、充実した子どもたちの深い感想、高い感性にただただ感激いたしました。子どもたちは感動をそのまま表現してくれ、私の演奏や話を集中して聞いてくれました。感想の中で「桜が風に揺られて花びらが 1 枚ずつ落ちていくような感じがした。」「夏なのに演奏を聴いていると春を感じた。」等があり、箏の演奏を聴いて日本の文化と切り離せない季節（四季）を感じたり、様々な桜を思い浮かべたりしながら聴いてくれたことが素晴らしいと思えました。私が今まで外部講師として伺った小中学校の授業と 1 番違ったところは、授業をされる先生と演奏家との打ち合わせがしっかりできたことです。45 分間の授業が有意義で進行がスムーズにいくための共通認識（ねらい・テーマ）や、お互いの役割（演奏前の教師の言葉かけ、見る・聴く・想像するなどいくつかの視点の提案など）は、学校によっては演奏家にお任せになる場合もあるので、子どもたちの実態を把握されている担当の先生との事前打ち合わせの大切さを痛感いたしました。今後に生かしていきたいと思えます。この授業を通して、子どもたちが邦楽に親しむきっかけ作りになればと願います。

本蔵 理恵

本実践を通して、演奏家と教師との連携・協働により、子どもの実態に沿った系統的な授業へと発展する見通しが期待できた。音楽室のような至近距離で生演奏を鑑賞することで、演奏家の息づかいや演奏に向かう姿勢を肌で感じてより深い感動を体験したり、演奏家と子どもたちとの相互コミュニケーションが深まることで生涯にわたって和楽器に親しもうとする姿勢が出来たのではないかと考察できる。

しかし学校現場の現状を見てみると和楽器が学校に整備されていなかったり、教師側が和楽器や伝統音楽に対する経験不足から苦手意識を感じていたりする場合も少なくない。和楽器には、日本古来の独特な音色の美しさや、13 本の弦から織りなす深い響きの美しさがあり、子どもたちが実際に箏を演奏する活動を通して、今までの学習では体験したことのない感動を呼び起こされる可能性を有している。感性豊かな成長著しいこの時期に和楽器に出会ったり、日本の音楽に親しんだりすることは自国のアイデ

ンティティを育む上でも非常に有意義である。演奏家の優れた生演奏を聴き、演奏に向かう真摯な態度を肌で感じられるアウトリーチ活動を導入することで、子どもたちが日本の伝統音楽の良さを見つめ直し、より日本の伝統音楽や和楽器に対して理解を深めていけるのではないだろうか。

本稿での実践を踏まえて、今後さらに、アウトリーチの効果的な活用の可能性を追究し、音楽が持つ魅力を子どもたちに伝える授業の展開を考えていきたい。

本論文は、既発表論文が査読により修正し掲載されるものである。

(1) 齋藤豊「音楽の授業におけるアウトリーチ活動の展開 ―アウトリーチ活動の目的と形態からみた分類の試み」『音楽教育実践ジャーナル』 vol.10 no.2, 2013, pp.71-79

(2) 林睦「音楽教育におけるアウトリーチを考える ―基本的な考え方, 歴史的経緯, 最近の動向」『音楽教育実践ジャーナル』 vol.10 no.2, 2013, pp.6-13

【参考文献】

『教育音楽小学版』 音楽之友社, 2008, 4-2013.3